

売薬の意匠あれこれ

北多摩薬剤師会会長、立川市薬剤師会会長代行 平井 有(ひらい・たもつ)

その6 ■ マスク美人

「マスク」イコール「病人」と見る外国人からすると、日本人のマスク好きは世界的に有名です。一般社団法人日本衛生材料工業連合会のデータによると、その生産量(国内生産+輸入)は平成27年で産業用、医療用、家庭用を合わせてなんと50億枚、家庭用だけでも37億枚に達する勢いです。

大正7年から大正8年にかけて米国で発生したスペインかぜと呼ばれたインフルエンザが、複数の国や地域で患者が発生するパンデミックとなりました。このインフルエンザの大流行をきっかけに、日本ではマスクが予防のための衛生材料として広く普及したようです。

「呼吸器」と呼ばれていた頃のマスクは、黒い布製で内部に網状の金属が仕込んであったり、セルロイドで成型されていたり、内側にガーゼをあてて幾度も繰り返し使う貴重品でした。価格は現在の貨幣価値で数千円だったと思われまます。

いつの間にか防寒対策や顔を見られたくないからなど、本来の目的とは異なる使い方もされるようになりました。特に近年はファッションとして伊達眼鏡ならぬ伊達マスクという造語も作られるほどです。マスクをつける目元(めもと)が強調され目が魅力的になり小顔にも見える「マスク美人」という言葉も生まれました。

今回は、昭和時代のガーゼマスクをした美人がデザインされた咳止めや感冒薬の置き薬をこ

マスクの内側には
金属やセルロイドをはめ込んでいる

